

パリの変貌——二十年ののち——

奥村 功

- I. 黒いパリから白いパリへ
- II. 二十年間にみられる大きな社会的変化
- III. 伝統的なフランス風生活様式の後退
- IV. 街に見る解放感
- V. フランス社会の問題
- VI. フランス社会の美質

84年の秋から一年間、フランスで勉強の機会を与えられパリに滞在した。もちろんフランス語を担当する教員としての研究課題があつたわけだが、ここではそれに触れず、主として学部の学生諸君の関心をひきうる読物になるやう、パリを通して見た近年のフランス社会の変化について私見を述べたい(かなづかひは歴史のかなづかひによる。その理由はこの文の最後のところに示す)。

外国のなかでも欧米社会についての情報は現在の日本にあふれてをり、とりわけパリをめぐる、いまさら一滞在者の帰朝談でもあるまいといふ気持は当方にもある。かうした主題について語るのに適した、対象の国を熟知した人はほかにいくらかあるのは承知の上のことである。ただ、時間をへだてて社会の動きを見ること、そして「変化」を個々ばらばらでなく、その底にある流れとともに見てとることは、人それぞれに試みるに価するやうに思はれる。

I. 黒いパリから白いパリへ

私の最初のフランス滞在は63年から65年の二年で、そのころは時の文化大臣アンドレ・マルローの提唱による建物外壁のよごれ落しが始つたばかりで、パリはまだほとんど黒かつた。パリの二十の区の旧市街地はおほむね五・六階から十階程度の建物で埋まつてゐて、それ以上の高層建築はなかつた。かういふ市街地は、(ナポレオン三世の)第二

帝政期から形ができ始め、二十世紀初にはあらかた完成していたと言ふことができるだろうが、黒々した、石づくりの、整然たる街並は圧倒的な力を持つてゐた。

73年の夏にひと月パリに滞在したときには大きな景観の変化が生じてゐた。街はすっかり白くなつてゐた。さらに根本的な変化は、ポンピドゥー大統領の近代化路線の結実として、西の近郊のデファンス地区に超高層の事務街が姿を見せ始めた。ヨーロッパ最高、六十階のモンパルナスの塔も都心部に完工。そして旧市街の周辺部には二、三十階の高層住宅が林立しだしてゐた。

六十年代後半から十年ばかりについて、パリの変化は、他の都市とくらべ、あるいはこの街の他の時期とくらべ、際だつていちじるしかつたと言へやう。それがとくに目立つ理由として、第一にこの街の変化が二十世紀に入って緩慢であつた、第二に戦災を受けなかつたことを考へあはせる必要があるだらう。わづかな間にパリは、その外観について言へば、十九世紀の名残りとどめた街から、二十世紀の息吹を感じさせる街にと変貌した。もちろん、この街のすべてがではなく、ここには中世も、大革命前の旧制度も「もの」として強固に残つてをり、それらは周到な保存の対象になつてゐるのだが。

滞在の印象とは、どれほど確かなものだらうか？ 予備知識をもつてゐる国内の都市についても人の印象はさまざまだが、外国の都市の場合は、歴史や生活の背景がことなり、情報は体系を欠き、言葉の障害がついてまはる。時期による都市の変貌は、その街にたいする人々の印象を大いに左右しさうである。

こんどの滞在で私は、パリの街の外観の変化にはもはや驚かなかつた。デファンスはできあがり、高層化は周辺部でずつと進行してゐるが、それは十年余前にすでにあつたものの延長でしかない。大きく見れば、六十年代後半からの民需を背景にした都市改造は、現在では経済不振のなかで鎮静し、大規模な建設はむしろ、社会党政権の実績づくりともいへる公共投資にその中心が移つてゐるやうに見える。ルーヴルの大改造、オルセー美術館、バスチーユの第二オペラ劇場、ヴェレットの科学館……。

パリの外的な変化より、人々の生活様式の変化の方がむしろ私の目を引く。ひと月のあひだでは気づかぬことにも、長い間みると観察は及ぶ。この二十年のあひだにフランスをゆるがした、大きな「事件」を二つあげるとすれば、だれしも68年の「五月革命」と、81年（やつぱり五月）のミッテラン社会党政権の成立をあげるだらうが、さまざまな変化はこの二つの出来事と深いところでつながつてゐるやうに思はれる。

II. 二十年間にみられる大きな社会的変化

生活の変化を主にこれから見てゆくが、その前に、さうした変化の根底にある、いくつかの社会的規模の変化をあげておかねばならないだらう。いま五点に分けるが、いづれも西ヨーロッパのなかで英独仏のそれぞれにあてはまるやうに思はれる。

一、経済不振。

雄弁な一例として、二十年前と今の為替相場を見てみる。

	63年 (固定相場)	84年—85年 (変動相場)
米 ドル	360円	220円～260円
英 ポンド	1,008円	285円～340円
独 マルク	90円	77円～ 85円
仏新フラン	73円	25円～ 28円

マルクと円の比率はあまり動いてゐないのにくらべ、フランは円にたいし三分の一の比に近い。

国別の経済数値の比較がよく記事になる。国内総生産、国際収支、物価上昇率、失業率等々。ある日の『フィガロ』はその表に *Moins bien qu'ailleurs……*（どこよりも悪い）と見出しをつけた。合衆国や日本はともかく、落ち目のイギリスよりも悪いといふいらだちが感じられる。わづかにイタリアよりはいい……。

二、一の結果として失業者の増加。

240万人で失業率は約10%。しかも若年層において高い。失業手当が切れれば問題はさらに深刻になる。clochards とは元来、働く気のない浮浪者を指したが、職がないためのクロシヤールや物乞ひも増えてゐる。

三、移民・難民の増加。

昔からパリは外国人労働者の多い町であつたが、流入は歴然と増えてゐて、しかも全国の工業地域に及んでゐる。出身地は北アフリカが第一。ポルトガル、スペイン、近東、そして難民としてインドシナ半島。失業者の増加のなかで、移民はフランス人から職を奪うものとして、しばしば攻撃の対象となる。Le Pen といふ政治家のひきいる極右の党派 Le Front national がその急先鋒で、10%を越す支持を得てゐるのは重大な

* 労働者に限らず家族をも含む外国人総数は、84年版の *Quid?* によると、62年の201万人が82年で422万、総人口の8%。外国人の70%が10年以上の滞在。5人に1人はフランス語を話せない。子供の4分の3はフランス生れ。

現象であらう。

移民といっても、すでにフランス国籍をとったもの、労働許可を得たもの、不法就労者といろいろだが、フランスが何百万もの外国人労働者をかかへていくしかないのは明らかだ。文化のことなる彼らをどうフランス社会にとりこんでいくか。たとへばイギリスと同様フランスでも、外国籍労働者の選挙権を地方選挙で認めるところがあらはれてゐる。保守派の有力政治家シラク（パリ市長）は「フランスは多民族国家だ」と述べて物議をかもしたが、かうした発言にも、移民がフランスで無視できない社会的力になつてゐることがうかがはれる。

四、治安の悪化。

これは日本でもよく知られてゐる。メトロの車内や駅に急を知らせる装置がつけられてゐる、スリについての注意書きがあるなども、さうした措置の必要な現状を物語るものだらう。二十年前にはヨーロッパの町は（ナポリなどを除けば）日本の盛り場よりむしろ安全なやうに思はれたのだが……。

メトロはパリの人間が危険を感じずる場所のやうだが、日に四回乗るとして（昼食に家へ帰る人はいまでも多い）襲はれる確率は二百五十年に一回といふ、人を食つた記事も読んだ。どこと比べて危険といふか、またその人の体験によつても感覚はちがつてくるだらうが、私自身は、物騒な場面を目撃したことはあつたが、パリが言はれてゐるほど危険とも思はなかつた。前述のやうな対策で事情がある程度よくなつてゐたのか。

第十八区（モンマルトル）近辺での九件に及ぶ老婦人連続殺人、人の居合せた車内や街路で起つた婦女暴行など、治安の悪さの例はいろいろ挙げられるが、さうした事件が外国人労働者の住む地域に多いことが移民への反感をつのらせ、ときには理由なく彼らを悪者にするにもなる。

各地の刑務所は過密で、それがまた受刑者の反乱のもととなり、あちこちに波及した。

五、女性の社会的進出。

以前にくらべ働く女性がうんと増えた。経済力を背景にして、さつそうと見える。femme libérée（解放された女）の目印は煙草と、男と同じやうに怒り肩の服であらうか。パリの郵便配達はおほかたが女性になつてゐる。

III. 伝統的なフランス風生活様式の後退

一、食事が簡単になつた。

もちろん世界のどこよりもフランスは、質量ともにすぐれた食事を、しかも時間をかけてとつてゐることに変わりはないと思ふが、しかし、葡萄酒なし、肉のほか一皿だけの食事の人もよく見かける。葡萄酒、チーズの消費は、ことに若い年代で減つてゐる。昔ゐた大学都市では食事は必ずコースになつてゐたが、現在ではその伝統的メニューと一品料理の略式メニューのどちらかを選ぶ。

代つて外国料理を目にすることが多くなつた。地中海料理のクスクスや、ギリシヤの *feuille de vigne*（葡萄の葉に米を包んだもの）など、いまではフランスの家庭料理の一部になつてゐる。外国料理店も街に氾濫してゐる。以前はその多くは中国（もしくはヴェトナム）料理店であつたが、現在はピザの店、ギリシヤ料理、マクドナルド、そして日本料理店も。世界のどこにも見られる生活の国際化の一例であり、パリの場合は外国人労働者にとつてとりつきやすい業種でもあるが、なによりも安くて簡単だから客が来る。

日本料理は高くて量が少い定評なのにそれなりの人気があるのは、健康食といふ見方と調理法への好奇心からで、これは別の理由によるが、現在のフランス人が外国料理で簡単にすませるのは第一にはふところ具合ゆゑで、経済力の沈下がやはり影を落してゐる。国内（ブルターニュ地方）の料理だが、クレープの店が多くなつたのもさうだらう。

二、衣料が粗末になつたのに驚かされる。

これは数日の旅行者でも気づく。劇場へは以前、左岸でも右岸でも、ネクタイなしは少なかつたが、いまは大方のところではそれで違和感はない。これもシンプル・ライフといふより、経済的理由であらう。花のパリが索漠としてきた。かつてコメディ・フランセーズがしてゐたやうに、正装着用の日を設けてゐる町の劇場もある。社交の楽しみを求める一部の層の願望に応へようとするのであらう。

三、一、二に述べたのは現在の購売力低下の現象だが、それにもかゝらず、フランスもまた大量消費社会になつてゐることを感じさせられた。フランスの百貨店は高級品を売る場ではないが、それでも以前は売場は閑散としてゐて、すぐ店員に入用の品をたづねられた。ところが今では、日本とまつたく同様の雰囲気になつてをり、ときにはそれ以上に商品を山積してゐる。あつけない変りやうである。

四、テレビジョンの浸透。

二十年前のフランスでは、放映時間は短かく、このメディアはほとんど無視することができた。現在、かなりの家庭が日本人と同じやうにこれに時間をさいてゐる。受像機

を持たない人はことに知識層に見かけるが、TVを見てみると平均的フランス人の話題の一部を欠くことは間違ひない。

IV. 街に見る解放感

上に述べたのは、フランスがフランスでなくなりつゝあるやうな、いはばわびしい傾向だが、変化を別の角度から指摘することもできる。

一、街が明るくなつた。

先述の建物のよれ落しだけでなく、街に見る色彩が総じて明るい。例へばメトロの通路は以前もっと単色の世界だった。建物だけでなく人の装ひも。かつて老女ヤソルボンヌの先生はほとんど黒づくめの服装だったが、さうした古典的な姿はどこにも見かけない。

目に見えない、生活の雰囲気もやはり移り変わる。フランスは明文法の社会で、日常の細部に及ぶ規定で律せられてゐるのだが、この管理への傾向がやゝ弱まつて、人の随意に多くをゆだねる、のびやかな気分が広まつてゐるやうに見うけられる。メトロのかけこみ乗車を防ぐ扉はもう動いてゐない。バスの中に見かけた、窓の開閉についての大層な規定はいまは無くなつたのだらう。街のあちこちにやはり、「張り紙を禁ず」の注意が、百年前の法令を引合に出して書かれてゐるが、もうなんの役にも立つてゐない。

かうした変化のもとには1968年のいはゆる五月革命があると言ふことができる。この大事件をどう見るかは人によつてさまざまだが、これをきっかけにフランスが變つたことについては、たいていのフランス人が異論がない。「禁ずることを禁ず」とは五月の落書のひとつだが、社会による拘束を緩めて、個人の創意を重んじることを求めた「五月革命」の精神は、フランス社会全体のなかに取りこまれたと言つてよい。

二、余暇の拡大。

日本と比べて感じ入るしかない。労働時間はほとんどの職種で39時間、さらに81年以降、年次休暇が五週とれることになつた。フランが弱くなつただけに、国内でヴァカンスを過す人がふえたが、安い休暇村がずいぶん充実したやうだ。

公共の新しいスポーツ施設を数多く市中に見かける。映画館、劇場も数がうんと増えた。ことに映画館は近年、小屋を小さくいくつにも改造して、しかも昔とちがつてどこ

* すき間風をめぐつて、よく口論があるが、その裁定のための規定。窓を開ける場合の注意を述べてゐる。

とも連続上映だから、見られる映画の数は飛躍的に大きい。もつとも、短い期間で測るなら、営業不振での閉鎖が続いて映画館は減少気味といふが、二十年前と比べればおびただしい増えやうだ。劇場も数量的にはにぎやかで、パリ市が従来の大劇場のほかに小劇場をあちこちに持つなど、劇場地図も小劇場を中心に、変化をみせてゐる。若い劇団への、パリ市の補助政策も国の向うをはって行はれてゐて、それが演劇の活況のひとつの支へになつてゐるのは確かだ。

三、若者の街の出現。

パリの若者の街は、かつては左岸のラテン区あるいはサン・ジェルマン界限と言へたであらう。しかし、これらの街は若者を相手とする商店は多くとも、街の景観は他と異なるらない。ところが、ポンピドゥー・センター(77年完成)や、ほど完工を見たフォーラムは、他と画然と異なる外観と高密度性で、構想そのものが新奇であつた。ニューヨークや東京ならともかく、パリの真中にかうした街区が現れたのは年代記もので、好悪はともかく、新しい、若いパリの姿のひとつがそこに見られることは間違ひない。

四、規範のゆるみ

のびやか過ぎると、規範のゆるみと映ることが目につく。パリの公衆電話の九割ほど(!)は壊されてゐるか故障してゐる。音に無神経になつて、音楽を流すレストランがときにある。けしからぬレコード店では屋外に音が流れてくる。もつとも日本の店のやうに傍若無人ではないが……。車のクラクションもいまは日本をしのぐだらう。

犬がたいへん増えて、大きなのがメトロにまで乗込んでくる。子供が人中で騒がないのと、犬が吠えないのは、人間が野性を抑へこんだ証拠で文明社会の美風だと思つてゐたが、犬を道に野放しにしてゐるのを時折見る。

乗物で席をゆずることがすくなくなつた。男は老いても女性に席をゆずるのがフランス式の礼節であつたのだが、女が働くやうになつて、もう「かよわい存在」でなくなつたのか? 風儀が万事悪くなつたのは68年5月以来、と懐旧派の人々は言ふが、その当否は知らず、フォーラムのFNACの店で地面にしやがみこんで漫画本をすわり読みしてゐる若者の姿を見ると、むしろ世界のあちこちと同じ現象がこゝで見られてゐるといふ印象が強い。

V. フランス社会の問題

一、能率の低さ。

工業における生産性が低い例として自動車産業がよく話題になる。トヨタにくらべジョーは、そして国有のルノーはさらに悪く、労働者一人あたりの生産台数は数分の一だ等々。銀行についての新聞記事のなかの表を引く。「アメリカを除く百大銀行——日本が上位を占める」と題する記事^{*}で、資産額の上位十行を挙げてある。（次頁掲載）

日本の各銀行の好調が特記され、『フォーチュン』誌その他に拠つて分析がなされてゐる。そこに記述はないが、従業員数の対比も意味深いやうに思はれるのだが……。

労働規律の悪さは、とりわけ公務員の場合目にあまり、外国人の滞在者もしばしば苦い経験をさせられるが、大学行政を調査した会計検査院の報告^{**}では、事務39時間、現業41時間30分の勤務時間はほとんど守られてゐない。ひどい例では、パリ第八大学において清掃員は日に2時間半働けばよいので、外でもうひとつ仕事やれるといふ。九月に始まるフランスの新学期が無事すべりだすかどうか、よく新聞の話題になるが、かうした事務機構では当然のことだ。

日本人が遠距離通勤で失ふ時間をフランス人は行列で失ふ。郵便局でも悩まされた。機械化は進んでゐて、郵便物の種類と料金の基準を入れれば、目方に応じて料金が示されるのだが、ごく簡単なその基準を覚えてゐないので間違ふ。四五人ある係員がそれぞれにへまをやる。昔ゐた大学都市では外国郵便に慣れてゐたせいも、さすがにこんなことはなかったが……。

同様のことは、いろいろの分野で見あたる。小さな展覧会だと、よく初日が遅れる。図録ができてゐないことも多い。筑波の博覧会はフランスでもおほいに関心を引いてゐたが、フランスの陳列を報ずるラディオが「かうした場合のフランスの悪いくせで、準備のできてゐないところがあつた」と述べてゐたのには苦笑した。

日本へ帰つた翌日、国鉄の定期を買つたところ、申込用紙を受取つた駅員は、まづちらりと腕時計で次の電車までの時間を見て、急いでやつてくれ、六カ月定期が二分間でもらへた。日本人のこんな仕事熱心と気ばたらきは、フランスにかぎらず、どこにもさうざらにないものと誇つていゝだらう。

二、エリートと大衆の差。

国民一般の教育水準と労働意欲を高めなければ経済の再浮上がむつかしいことは、政府ももちろん意識してゐる。シユヴェヌマン教育大臣はよく日本をモデルとして引合に

* 『ル・モンド』85年8月23日。

** 『ル・モンド』85年6月2—3日。

Les dix
上位

RANG 順位		BANQUES 銀行	PAYS 国
1984	1983		
1	1	Dai-Ichi Kangyo Bank	Japon
2	2	Fuji Bank	Japon
3	3	Sumitomo Bank	Japon
4	4	Mitsubishi Bank	Japon
5	6	Sanwa Bank	Japon
6	5	Banque nationale de Paris	France
7	8	Caisse nat. de Créd. agric.	France
8	9	Crédit lyonnais	France
9	11	Société générale	France
10	7	Barclays Bank	G.-Bret.

(Source : Fortune.)

出す人だが、この人がラディオで「進んだ国、すなはち合衆国、日本、西ドイツでは……」と言つたりするのは、国民にショックが必要と考へてゐるのだらう。政府は公務員の全体としての削減を毎年図つてゐるなかで、教育と技術研究部門には相当な増員をしてゐる。^{*p.175} ファビュス首相のお声がかかりて小学校の教育にマイクロ・コンピューターを取入れることになつたのも同じ趣旨だらう。

三、ちぐはぐな機械化。

上の二、のひとつのあらはれだと思ふのだが、機械化に努めてゐながら、それが十分な効果を見せてゐない例を散見した。たとへば国有鉄道やR E R (首都圏高速鉄道網)の自動切符発売機。片道か往復か、普通料金か割引かなど、いくつもボタンを押さねばならないので時間がかかる。それに駅名の配列がアルファベ順で、いはばデジタル式であるのも、路線上の順序による、日本のアナログ式にくらべてこの場合は検索しにくいと思ふ。機能が複雑なだけに大型で、台数をおけない。つり銭を切らしてゐることも多く(これ自体、管理上の問題だが)、そうなれば切符の金額きつかりを入れないことには出てこない。50サンチームの端数があるときなど、その硬貨を持つてゐないと買へないことになつて大変不便だ。

郵便局の待合室にも、(窓口のちががつて)お客が自分で料金を計れる大きな機械が最

premières

十 行

ACTIFS 資 産	ÉVOLUTION en pourcentage 増加百分比		DÉPOTS 預 金		EMPLOYÉS 従 業 員
En milliers de dollars 単位千ドル	Dollar E. U. 米ドル	Monnaie nationale 現地通貨	En milliers de dollars 単位千ドル	Rang 順位	
125,464,192	7.57	12.70	93,641,981	1	21,986
115,845,047	6.77	11.87	87,381,644	2	16,420
114,942,390	8.88	14.08	85,311,948	4	15,136
113,031,721	9.42	14.64	81,927,027	6	15,834
102,419,627	7.31	12.44	79,167,740	7	16,158
98,375,893	2.76	12.61	83,314,585	5	60,014
91,855,084	1.67	17.74	85,354,333	3	74,154
89,930,239	1.90	18	77,976,548	8	54,795
86,590,427	0.13	15.96	76,263,611	9	44,088
85,255,434	9.50	13.43	78,842,186	11	125,900

* DIMINUTION DES EMPLOIS PUBLICS

公務員数の削減

	(Emplois 1985) 員 数	(Emplois 1986) 員 数
Agriculture et industries agro-alimentaires, culture 農業及び農業食品産業.....	- 186	- 171
Economie et finances 経済・財政.....	- 1,915	- 956
Education nationale 教育.....	+ 2,289	+ 1,700
Intérieur et décentralisation 内務・地方分権.....	- 405	- 271
Justice 法務.....	+ 350	+ 352
Recherche et technologie 研究・技術.....	+ 600	+ 1,400
Relations extérieures et coopération 対外関係・海外協力.....	- 1,801	- 1,413
Service du premier ministre 総理府.....	- 19	- 1
Solidarité nationale, santé, travail, emploi 厚生, 労働, 雇傭.....	- 393	- 417
Transports 運輸.....	- 162	- 177
Urbanisme et logement 都市計画・住宅.....	- 1,000	- 1,034
Divers その他.....	- 812	- 345
Total pour le budget général 総予算分合計.....	- 3,454	- 1,333
PTT 郵便.....	- 2,000	- 3,000
Total général 総計.....	- 5,454	- 4,333

【ル・モンド】85年9月20日

近に入つた。秤と料金指示機を兼ねてをり、葉書から小包まで、世界のどこへでも、郵便の種類と宛先によつて(書留以外は)料金がわかるものだが、そのためにはずいぶんボタンを押さねばならない。さきの切符発売機にもまして使ひ勝手が悪く、あまり意味のない考案と思へる。

かうした発明は技術者の自己満足の独走にすぎず、なんの省力にもつながらない。それは下からの提案がないことの、ひとつの証左で、さらに言へば経営の硬化した一面をもそこにうかがへるのではないだらうか。

四、病理的現象のひろがり。

治安の悪化や麻薬の流行といふ、欧米社会に共通の悩みがパリにおいてことに深刻であることはよく知られてゐる。いづれも進行は一段落したと言はれるが、鎮静に向つてゐるわけでもない。

五、報道の安易さ。

これは意外な気がした。グレゴリー坊や事件、ボワチエの二医師が無実の罪に問はれた事件など、各紙が警察と同じく軽率な動きをした、非理性的なセンセーションナリズムにはあきれた。エルサンが牛耳る新聞界の現状を物語るものかも知れない。『コンバ』はどうになく、『ル・モンド』も Greenpeace の件で報道の力を示しはしたが、以前のやうな判断の正確さと圧倒的な質をもつてゐるとは言へない。日本の新聞にも同様の例があると思ふが、週刊誌との役割分担があつて、もすこし抑制がきいてゐるかに見える。

VI フランス社会の美質

この国の好ましくない面をいろいろ挙げたが、これらは日本でもかなり知られ、ときにはそれがやゝ強調されすぎるくらゐだ。しかし、この国は生活の質の高さにおいてなほ我々を絶望せしめるものを持つてをり、欧米諸国のなかでも日本と対極の位置にある思ひがする。

一、「開かれた場」の印象。

ことにパリでは外国人に、労働者や観光客としてだけでなく、あらゆる生活の場出会ふ。外国人との接触の場が限定されてゐる日本人には想像がむつかしいのだが。この都市で得られる反響の効果をねらつて政治家の往来も多い。世界の動きがこゝには否応なしにびんびんとひびいてくる。日本では手薄なアフリカ、アラブ世界、南アメリカについての情報も豊富で、全方位に開かれた場の印象がある。

二、個人の重視。

人間が集団への帰属によってでなく、個人としての独自性によって評価される、といふのがフランス個人主義のたてまへで、たしかにこの点でフランスに優るところは世界にないだらう。日本では職能人としてすぐれてゐるかどうかが人物判断の第一の基準だが、フランスでは職業上の属性のほか、その人ならではの自己の実現が重んじられるやうに思はれる。

さういふ考へ方のあらはれとして、個人が集団を介さないで社会全体に発言する機会も多いと見える。政治家にたいするインタビューも、お説拝聴でなく議論の形をとつて進むことになりやすい。ラデイオの聴取者参加番組で、その日の話題の一件の責任者がかゝつてきた電話に即答を求められたりする。いはく、バカロレア（全国一斉の大学入学資格試験）の面接の日に試験官が欠席、試験がとりやめになつたのはけしからぬ。面接の順もわからぬまゝ廊下で立つて三時間も待たされた等々。もつとも、かういふ機会があることがすなはち、個人の意見が実際に社会を動かすといふ証左ではないが……。

社会党政権ができて間もない81年9月、フランスは死刑制度を廃止した。国民議会の投票結果は有効票486のうち賛成363。このなかには保守派（RPR, UDFのいずれも）に属する議員42人が含まれてゐる。個人の倫理観による判断にまつべき問題として党議拘束をしてゐないのである。

日常のことで言へば、市街地の交通信号はフランスでは比較的すくなく、小さな交差点にはついてゐないことが多い。運転者同士、あるいは運転者と歩行者のあひだの、その場の判断にゆだねる方が、外的な規制を設けるより好ましく、うまく運ぶといふ考へであらう。

三、余暇の豊かさ。

五週の年次休暇は世界で指折りではないだらうか。うち二週はまとめて取らねばならぬことになつてゐると聞く。商店も以前から週休二日が一般である。この自由な時間が労働以外の場に個人の世界をもたせ、個々人の「経験」の豊かさに、社会全体の精神的なひろやかさに化す。これは短期間のモーレツな生産競争には不利な条件だが、長期的には力となる。個々のフランス人がもつ魅力の大きな淵源はこゝにある。

四、社会資本の豊かさ、成熟した都市。

欧米の都市とくらべて日本の市街の貧弱を言ふことは陳腐にちがひない。それらのなかでもパリはいはば特殊な理想型で、他の都市が必ずしもこれと同様につくられてゐる

わけではない。(現在でもすくなくとも都心部は) 整然とした街区、(政治経済文化などすべての面における) 密度の高い都市機能、過去の力強い存在、国際的性格、それらがこの街にはあり、しかも1871年のコミューヌの乱のあと、すなはち百年以上、大きな戦乱災害にさらされてゐない。その結果としてこの街は、国内の地方都市はもちろん、ヨーロッパの各首都にも勝ち勝つた近代的街景をもつてゐる。だから、この街をそのままなぞるのはともかく、近代都市の理想型として、われわれが都市について考へる場合の材料がそこには豊富に見いだせる。

たとへばセーヌ左岸に沿つてパリ市の行政区は東から五、六、七区とつづくが、この三つの区の性格はいはば虹の色のやうに連なりながら變つてゆく。まづ重厚な學術の街、カルチエ・ラタンの五区。それに接するリュクサンブール公園から始まる六区は同様に知的だが藝術の香りがそこに加はる。美術学校を中心に画廊がならび、サン・ジェルマン大通りにはしやれた遊びの店が多い。サン・ジェルマンを西へ行くと、そこは七区で品格が高く冷やかな貴族的の雰囲気が強くなる。かつての邸宅のおほくが政府各省や大使館になつてゐる。官庁街だが雰囲気は日本のそれとちがつて典雅である。

かういふ、なだらかな連続性は、それぞれの区からその南の十三、十四、十五区といふ、生活の勾ひの濃い地域とのあひだにも見られるし、時間に即して言つても、上述の各区の特色はゆるやかに醸成されたものである。

都市機能のいろいろが違和感のないやうに、自然なつながりを持つて配置されてゐるわけで、都市のさまざまな顔にふれるうちに、パリがひとつの人格的存在のやうに「つくりあげられてゐる」感じがしてくる。かうした街が成熟した都市といへるのであらう。

もちろん、小さな地域についていへば、同様の指摘ができる都市は日本にもいくらかあるのだが、都市の大きな部分がそのやうに出来上るためには人為と時間がどうしても要る。現代日本のおほかたの都市は無計画に、急激にひろがつたがために、さまざまな性格の地区がてんでに混在し蕪雜なのである。

五、基本にある文明の観念。

いま「つくりあげる」と言つた。人間は意志によつてその世界を構築してゆくものといふ考へが西洋には強いが、フランス語で *civilisation* と呼ぶものはその過程であらう。大都會のやうに、人間の手にあまる怪物と見える存在ももちろん可塑的なのである。

人間がきづきあげた文化をひろめ、それにのつとることを理想とする政治のあり方は、

東洋でも「文治」といふ名のもとに尊ばれたが、フランスでは、そしてたぶん中国でも、この観念は単に抽象的な目標ではなく、実体をもつべきものとして、ひとつの制度にひきあげられてきたやうである。そして、フランスの美質として挙げた諸点の底に一貫して流れてゐるかに思はれる。

具体例 その一。なんらかの分野で功績を残した人をいろいろの機会に、とりわけその死にあたってけの形で讃へる。叙勲や供花はもちろんどこでも行はれるが、さうした等級に置きかへる形式的評価でなく、大臣談話などといふ形で、修辞をこらして業績を偲び賞讃するのがフランス式のいゝところだ。それも、その人にもあてはまる言葉で、つまり個人としての価値、質にかゝる理解を示す懇篤な頌辞が求められる。たとへば84年秋に、アンリ・ミシヨーとフランソワ・トリュフォーが死んだときはジャック・ラング文化大臣が談話を発表した。

その二。アカデミー・フランセーズの会員が亡くなり空席が生じたあと、新しく選ばれた会員は就任演説に先任者の業を讃へる。すでに会員である一人が答辞で新任者にオマージュを捧げる。これは知的世界での大きな話題であつて、文章の粋をきはめた演説原稿が『ル・モンド』にのるが、いづれも小さな活字で延々二ページに及ぶ長大なものだ。

その三。バカロレア試験の長い論文の最優秀作が、これも『ル・モンド』にのる。共通一次試験の最高得点を発表するより、ずつと有益なことは確かだ。

その四。過去の芸術家を死後百年などの折に顕彰して、文化遺産の再認識の機会としてゐる。たとへば、84年はコルネイユの死後三百年、85年はユゴアの死後百年で、全国で無数の行事があつた。この盛んなことではフランスがおそらく最高ではあるまいか。この風は日本ではまだ、ないに等しい。

以上いくつか引例を重ねたが、文化の華を指し示すことが人心を教化するといふ信念が政治の根本をつらぬいてゐると言へる。三百年前の劇詩人のことばが、小学生にもよく理解される国では、文明は持続してゐるのであり、価値は積上げてゆくものである。

日本語のありやうについて私が考へ始めたのも以前のフランスでの生活体験がきっかけになつてゐる。古い言葉とできるだけ切れない言葉で思ひは新しく語ることが可能だらう。語法、語彙、用字いづれについても。ふだん私は場に応じて用字を使ひかけてゐるが、こゝでは略漢字体、旧かなづかひで書かせてもらつたわけである。

パリは変つた、と始めながら、変らぬところもあると終つた。読み返すと、焦点さだ

まらず、体裁も紀行文、随筆、報告、評論のどれともつかない。意には満たないが、忙中にしたためた時事文としてお許しを願ひたい。いまフランスは間違ひなく大きな節目にさしかゝつてゐる。こゝで筆を措いて、目睫の三月十六日に迫つた国民議会選挙のあとに予想されてゐる前例のない *cohabitation*（大統領と内閣の呉越同舟）がどんな結果を生むか眺めることとしたい。

（86年2月28日）